

○ ○ ○ ○ ○
地域医会だより

三浦半島皮膚科懇話会 横須賀市医師会皮膚科部会学術講演会

第38回三浦半島皮膚科懇話会 第21回横須賀市医師会皮膚科部会学術講演会

日 時：2007年2月24日（土）17：30～

場 所：ホテルトリニティ横須賀 5階「大楠」

製品紹介：アレルギー性疾患治療剤「アレジオン ドライシロップ」（日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社）

特別講演：QOLを考えたアトピー性皮膚炎の治療

講 師：東京女子医科大学 皮膚科教授 川島 眞先生

成人のアトピー性皮膚炎（AD）患者のQOLは、一般的なQOL調査票であるWHOQOL-26を用いた調査から低下していることが分かっている。特にステロイド忌避の患者でその傾向が強い。これらの患者にタクロリムス軟膏を主体とした治療を施すことにより、それまでのステロイド外用剤主体の治療に比べ、QOLが改善することが判明した。

これは小児においても同様であり、タクロリムス軟膏の治療により、AD患児のQOLも改善することが示された。また興味深いことに、同時に調査した保護者のQ

OLも著明に改善した。抗ヒスタミン剤に関しては、AD治療における有用性が十分には示されていなかったが、ADの痒みを優位に抑制することが、エビデンスレベルの高い本邦での試験から明らかにされ、さらに3ヶ月間は抗ヒスタミン剤を連続して内服する方が、痒みのあるときのみ内服する間欠投与よりも有意に痒みを抑制することが判明した。そして、なんら特殊な治療は必要とせず、ステロイド外用剤、タクロリムス外用剤、保湿剤、抗ヒスタミン剤を組み合わせた標準的な治療法のみで、十分に患者のQOLが向上することも本邦での大規模な試験から明らかにされている。

このように、AD治療は通常の治療で多くの場合は十分な成果が得られるが、それでも難治な例に遭遇する。そのような例では、精神的なストレスからの逃避として嗜癖的な搔破行動が見られる場合が多い。搔破することによってストレスを忘れ、それがいつしか快感にまで思えるようになり、止められない状態に至ってしまう場合がある。そのような例では、標準的な治療のみでは十分なQOLの改善は得られず、メンタルケアを加える必要がある。AD患者の一部は、より効果の高い治療法の開発とともに、医師及び医療サイドとの対話を強く望んでおり、我々はその思いに応える必要がある。





地域医会だより

小田原皮膚科医会

小田原皮膚科医会講演会

日 時：平成18年9月13日（水）

場 所：小田原医師会 衛生会館2階第1教室

講 演：「毛髪文化史と再生医学」

～男性型脱毛症（AGA）の新しい治療について～

講 師：秋田大学医学部 感覚器学講座 皮膚科学形成外科学部門教授 眞鍋 求先生

日 時：平成19年1月23日（火）

場 所：小田原医師会 衛生会館2階第1教室

講 演：「臨床医としてジェネリック製品を使う前に」

講 師：東海大学医学部 専門診療学系皮膚科学教授

小澤 明先生

日 時：平成19年2月15日（木）

場 所：小田原医師会 衛生会館2階第1教室

講 演：「疥癬の最近の話題」

講 師：国立感染症研究ハンセン病研究センター

生体防御部長 石井則久先生

日 時：平成19年3月23日（金）

場 所：小田原医師会 衛生会館2階第1教室

講 演：「小児のアトピー性皮膚炎の痒みのコントロール」

講 師：東京慈恵会医科大学 皮膚科学講座教授

中川秀己先生



地域医会だより

平塚市医師会皮膚科部会

第42回例会 テーマ「アトピー性皮膚炎の治療」～成人型の重症例を中心にして～

出席者：26名

日時：2007年1月24日（水）19：00～

場所：平塚市地域医療管理センター

司会：福永有希（平塚共済病院）

I アレグラ商品説明（19：00～19：15） サノフィアベンティス株式会社

II 症例提示（19：15～19：30）

Creeping Disease：木花いづみ（平塚市民病院）

カポジ水痘様発疹症を発症した重症アトピー性皮膚炎の3例：高山久仁子（平塚共済病院）

III 講演（19：30～20：30）

講師：向井秀樹先生（横浜労災病院 皮膚科部長）

【要旨】アトピー性皮膚炎（AD）は乳幼児期に発症して、多くは思春期までに自然に軽快する小児の代表的な疾患であった。ところが、昨今の住宅事情などの環境変化に伴い、AD患者数は明らかに増加、とくに成人例が顕著になった。加えて、マスコミを通じてステロイド外用剤の副作用問題が大きく取り上げられ、民間療法やアトピービジネスが横行した。その結果、慢性かつ難治性の患者が大幅に増え社会問題になった。

1999年から厚生労働省研究班や日本皮膚科学会によるAD治療ガイドラインが作成され、かなり治療法に関する混乱が終焉を迎えている。しかしながら、一方では社会の波に乗り切れず、頑なに本来の治療法に入れない、受け入れられない患者が存在している。また、忙しさに追われ、本来の必要な治療法を受けない、正しい治療法を修得する機会のない患者も少なくない。

今回の講演では、このような重症例を対象にしてどのように診察、治療していくかを話していきたい。また最近のトピックスを交えて病態や悪化因子についても述べてみたい。

IV 懇親会（20：30～21：30）

共催：平塚市医師会皮膚科部会、サノフィアベンティス株式会社

（文責：福永有希）

第43回例会 テーマ「開業医による、Office Surgeryの日進月歩」
～日常診療に役立つ、小侵襲処置手術法のあれこれ～

出席者：41名

日時：2007年5月23日（水）18：45～

場所：平塚市地域医療管理センター

司会：木花いづみ（平塚市民病院）

I バルトレックス商品説明（18：45～19：00）

グラクソ・スミスクライン株式会社

II 総会（19：00～19：10）

III 講演（19：10～20：10）

講師：西條正城先生（西條クリニック 院長）

【要旨】創傷治癒は広く開業医が日常最も身近に接する問題として、次々と新しい方法が紹介されている日進月歩の分野である。しかし、大学やその他の病院レベルの教育では、昔ながらの方法が踏襲されているに過ぎない格差がある。この現状をかえるには、少なくとも第一線の開業医が率先して“簡単容易で患者の負担が少ない方法、しかも理にかなった方法、それは何か”ということを常に考え工夫し実践することこそ、現場の実地医家に求められていることであると思う。このような考えから、先ず、創のケアについて10年以上前から提唱した傷は消毒よりもよく洗う方がいいという概念もまだ広く浸透していないことを喚起し、その後、教科書の定説に捕らわれなることなく、臨床的事実を第一にそこから学んだ簡単で容易な小皮膚外科診療のあれこれ（下記）を今回紹介した。小侵襲手術や処置の基本は、上に述べた簡便にして無駄を少なく不必要な患者の負担をなくすることに尽きる。

(1) 局所麻酔は、最少量で最大の効果を得るのを原則とする。“これには細い針（30G）と1mlのシリンジを使い切開線部皮下の注入だけで十分であること。(2) 傷のスカーレスヒーリングは、傷のサイズ、縫合の仕方、術後のケアを含め、切開線は可及的に小さい方がいいという“ミニマム創の概念”が大切である。(3) また、皺の方向を気にせず、短い傷にすることを優先したほうがいい。すなわち、切開線がしわの方向と直行しても短い傷を選ぶほうが目立たない。特に、円形皮膚欠損創の閉鎖では方向を選べば単純一次縫合を行っても“dog ear”を作らない。3倍の傷を作るという定説は、dog earへのこだわりである。(4) 術後のケアでは、もはや消毒やガーゼの時代ではなく、消毒に代わって洗浄を、ガーゼに代わってティッシュやキムワイプが実用的になるであろう。コスト面と資源保護の立場からガーゼは不要である。(5) 創閉鎖は一次縫合に勝るものはないが、例外的に指の傷はテーピングでしっかりした固定ができテーピングが最も有効な方法である。テーピングは固定が不十分なため創が離開しやすく癒痕が残りやすい。(6) Office surgeryの対象は広範であるが、生活に密着した分野が多い。その1つとして、まぶたと涙の問題は特に皮膚科と関連が深いので関心を持って見てほしい。アトピーなどでまぶたをこすることが“眼瞼下垂”の大きな原因となり、“流涙症”があれば涙で皮膚炎を繰り返す。眼瞼下垂や鼻涙管閉塞による涙流症は簡単な外来手術で治り、鼻涙管閉塞も最近NS(ヌンチャク型シリコン)チューブ挿入拡張術の開発により、治療が簡便に行えるようになった。いずれも、QOL向上に貢献できることが知られていない分野である。

最後に、陥入爪もふくめて患者サイドのセルフケアの普及が創傷治癒にも不可欠であることの大切さと従来の医学常識に捕らわれない臨床的事実に基づく医療の普及を願う。

IV 症例供覧（20：10～20：30）

宮本秀明（宮本皮膚科）：2年間の皮膚生検・小手術の結果

栗原誠一（湘南皮膚科）：性器ヘルペス再発抑制療法をこころみた症例

V 懇親会（20：30～21：30）

第44回例会 テーマ「軟膏を処方するものと調剤するもの、相互理解を目指して」

出席者：67名

日時：2007年9月26日（水）

場所：ホテルサンライフガーデン

司会：小島雅彦（こじま皮膚科クリニック）

I (19:30～19:45)

「神奈川県皮膚科医会におけるストロメクトール錠の使用アンケート調査報告」

北里大学皮膚科学教室 講師 高須 博先生

マルホ商品説明 駆虫剤「ストロメクトール錠3mg」について

II 講演 (19:45～20:15)

「外用療法指導の実際」

講師：中川秀巳先生（東京慈恵会医科大学皮膚科学教室 教授）

【要旨】皮膚科疾患に用いられる外用薬は、皮膚疾患が存在している皮膚局所の薬剤の濃度を高めることにより薬剤効果を最大限に高めることができ、しかも薬剤による全身性の副作用を極力回避することができるという特徴を有している。外用薬の副作用は長期連用により皮膚に生じる局所性副作用が問題となるが、それを回避し、効果を最大限に発揮させるためには、個々の外用薬の主成分の薬効・薬理・副作用の特徴を十分に把握し、用法・用量などの使用方法を患者に丁寧に指導することが重要である。

III (20:15～21:15)

「薬剤師会、医師会による外用剤処方についてのアンケート結果の報告と質疑応答」

ABC薬局 内田智久先生

湘南平塚クリニック 比嘉 功先生